
放課後の音楽室で

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の音楽室で

【コード】

N0814B

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

放課後、私は部活に行くのが楽しみだった。君の隣に堂々と座ってられる、この時間が私の幸せだった。

プロローグ

私が君を好きになったのは、ただ、かつこいいとか、一緒にいると楽しいとか、そうゆう事が理由じゃない。ただ、いつも『会いたい』って思ってたのは本当なの。

二月の冷たい空気が音楽室の窓を曇らせてる。空はどんより曇っているというよりもあの時、私にとっては雲が銀色に輝いているように見えただ。

そう　それは一年前、バレンタインの日。吹奏楽部の私は、同じTubaパートでひとつ下の君に恋をして、三ヶ月ぐらい経った頃だったね。

毎年行われている「バレンタイン・コンサート」。私にとってこの日がどんなに緊張するバレンタインだったことか。君はきっと今でも分かってはいないよね？ただ、いつものように私に

「青木さん。ここ、まだ分かんない。」

って楽譜を出して、指番号書いてって言ったの、私、覚えてる。

ねえ、今井君。私、君のこと、まだ好きなの。もうすぐ、バレンタインになるのにね。もう、あきらめてしまいたいって何度も思ったのね。ずっと、あきらめきれなかった。ずっと好きのままだった。あれから、一年が経って、もうすぐ私は引退しなきゃいけないんだ。その前に、もう一度「好き」って伝えたい。

あと、三週間。

君は私のこと、どう思ってるの？

プロローグ（後書き）

この話は名前以外は全て実際の出来事です。そして、引退するのは11月の始め（来月）、私にもこの物語がこの先、どうなっただけなのか分かりません。でも、良い終わりであってほしいと祈るばかりです。

2006年10月26日

著 Ascendium

好きになったのは…

「こんにちは」

私の部活はこの言葉から始まる。ほとんど誰もいない音楽室に入つて、すぐに楽器を出して、所定の位置に座る。そのときの私は、まだ二年生。先輩が引退して間もない頃。

不安だらけだったけど、君がいるから毎日、楽しく部活に通つていられた。それに、「音楽を生きる道にする」って、その頃にはもう決めてたからね。大好きな人の側で大好きなことができる…こんなに幸せな時間って他になかったよ。

私が一通り基礎練習を終えた頃、君はいつもニコニコして音楽室に入つて来てたね。(それは今でもそうか。)そして、私と同じように、男の子にしては随分と高い声で

「こんにちは」

つて言つて私の隣に座つて、楽器の用意をし始めるんだよね。確か…この頃はまだ、Tubaを置くためのスタンドを使つてたな。君は今も使っているけどね。一通り用意し終わつたら、私に雑談をしってくる。それは学校に来る途中に変なお婆ちゃんに会つて、自分の家がどこだか分からないから…と言われ、家庭内の事の愚痴をさんざん聞かされた事とか。担任の先生が実はロリコンだとか、「それは…ないだろ?」というようなフィクションがかつた事が多かつたね。

でも、そんなことで、君の事が好きになつた訳じゃない。決定的な事があつた。きつと、君にとってはほんの些細な事だったんだろう。私は、体育で失敗したことの責任を全て押し付けられて、その友達に愚痴を言われ、友達がいなくなつた時期があつた。

そんな時、救いの手を差し伸べてくれたのが君だったんだ。

いつもの雑談をしている最中に、君は生返事ばかりする私に気付いたのか

「青木さん、何かあった？」

「つて聞いてくれたね。すごい驚いたけど、すごく嬉しかった。ちゃんと私の言葉を聞いてくれる人が側にいるんだって分かって。そして、そんな優しい君が好きになったんだ。」

好きになったのは…（後書き）

11月の始め。先輩が引退して間もない頃です。前作を読んで下さった方は分かると思いますが、彼の名前は今井君（仮）です。背は私と同じ160ちょっとでした。（この時は）ルックスは至って普通…ちょっと幼い感じの子です。

告白

「好きになつたんだ」って確実に気が付いたのはバレンタイン直前のこと。

君からのアドバイスのお陰で友達とも仲直りできで、君に対する想いが少し変わったことには気付いてたけど、まだ「好きだ」って思つてなかつた時。同じ部活の同級生、木島 優衣から衝撃的な事を告げられた。

「ウチね…今井のこと好きなんだ。綾（私の名前「青木 綾」）あれと同じパートでしょ？恋のキューピットになつて！」

あまりにも突然で、初めはびっくりしてたけど、なんかモヤモヤしなげか応援できなかつた。そのことに気付くまで時間はかかったけど、そこで分かつたんだ。「今井のこと…好きなんだ」って。でも、気付くのが遅かつたのかもしれない。優衣はもうすでにバレンタインに今井に告白するって決めていた。

私は、このまま優衣が告白して両思いだったらどうしよう…という不安と、もし、私が告白して振られたら、今までと同じように楽しく部活ができるのだろうか…という不安があつた。だからと言って優衣に「私も今井のことが好きなの」って言う勇氣もなかつたし、私が告白して「いいよ」って言ってもらえる見込みもまるで無かつた。

バレンタイン当日。毎年恒例の「バレンタイン・コンサート」。その時、私は君にあげるチョコレートとラブレターを鞆に詰めていた。両想いになれるっていう自信も、希望も無かつたけど、このまま引き下がって後悔するのだけはイヤだつて思つてたんだと思う。演奏の終わった音楽室は少しだけ私をほっとさせてくれた。ときどきししながら渡したの。手、震えてたかな？

返事は、冬休みが重なって二週間遅れで帰ってきた。
友達から聞いたの。答えは「いいえ」だった。

告白（後書き）

実話なので、少し書いてる間に暗くなっちゃったりとか、泣いちゃったりとかしてます；；話は、まだ続きがあります。その続きは今までの事。そしてこれから起こることです。どうか、応援してください！

噂

冬休みが明けて、部活が始まった。私は憂鬱だったけど音楽室に向かった。

「なんか…今はまだ考えてないんだって。」
友達にそう言われて二週間も経つのに、気持ちの整理が付かない。何度も何度も後悔した。「言わなかったら、こんな思いしなくて済んだのかな」って。それと同時に「優衣はどうなったんだらう？」という疑問も生まれた。

もし、二人が両思いだったとしたら…そう考えるだけで足が重くなった。好きな人と同時に好きなものまで失ってしまうだろうか？そんな事を考えながら歩いていると音楽室に着いた。いつもと変わらないはずなのに、その日は音楽室までの道のりがひどく短かったように感じた。

その日は、珍しく君は私より早くに部活に来ていたね。いつもみたいに「おはようございます」って私に言ってくれた。

でもその日はいつもの雑談が無かった。かわりに、きちんと告白の返事をくれたね。逃げないでちゃんと答えてくれた。それだけで十分嬉しかった。でも、どうしても聞きたかったの…

「優衣と付き合うの？」

優衣が告白したって事、私は知らないって思ってたんだよね。すごく慌ててたように見えたもん。でも、そのこともちゃんと話してくれた。

「今はそういう事、考えてないから…」

それだけで十分、分かった。ほっとして、涙がでてきた。その時は困らせちゃったかな？ごめんね。

噂っていうのは怖いもので、誰にも言っていないのに何故か部活中に広まっていた。

「T u b a の先輩が、今井に告ったんだって！」

そんな言葉を今までで何回聞いたことか。今はもう飽きたのか、言わなくなったけど…。もちろん、それは優衣にも同じことが言えた。ある日彼女が私に相談してきた。

「先輩がさあ、何かしんじゃないんだけどアレのこと知ってて、いつつもうちに向かってそのこと言ってくるんだよね。マチむかつくんだけど！」

そんなことを言った彼女に、私は何故か打ち明けていた。

「…実はさあ…私も告ったんだ。今井に…」

優衣は驚いてたみたいだけど、「どうだった？」って明るく聞いてきた。きつと無理して笑ってくれてたんだよね。ごめん…。「無理だった」って私が言うところじゃあ、振られた者どうして訳か「って、特に責めることせず私を許してくれたね。

それから、先輩から同じような事を何度も言われたけど、優衣がいると思うと、今までみたいに楽しく部活をすることができた。

噂（後書き）

今回もつつみ隠さず実話です。この後は、番外編ということ、「今日の出来事」を書くつもりだと思います。今日、学校で「学芸発表会」が行われ、部活も演奏で参加したことです。

番外編く今日の出来事く

2006年10月27日(金)くもり。某中学校に通う私は、その学校で開催される「学芸発表会」(通称:学発)に吹奏楽部として出演するため7:45に学校の音楽室に行つた。朝早いのに、ほとんどの部員が揃っていて、楽器を持って朝練をしていた。その中の一人として私の好きな人、「今井 遼」も座つてTubaを吹いていた。

昨日の事から書きます。

学発前日、私は演目が他の人より多く、選択音楽、創作ダンス、選択国語、そして吹奏楽と四演目あつて前日から大慌てだった。部活に顔を出しながら、選択国語のMDをとったり、創作ダンスの練習で休み時間に抜けたり、裏で発声の練習をしたり…きつと楽器を持つていたのはほんの一時間ぐらいだったんだろうな…

四時からは国語の選択の練習ということで部活から抜けて、図書室で練習をしていた。メンバーは私と男子が(その時は)三人。本当はもう一人女子の子がいたんだけど、先に帰ってしまったらしく…四人で音楽を流し、台本の読み合わせを始めた。

それが一通り終わつて部活に向かおうとした時、メンバーの一人が「これから部活?」

そう話しかけてきた。私はそれを肯定して「何で?」と聞き返した。するとその男子は

「この後、楽器とか運ぶの?手伝うよ」

と言つてきた。私はその申し出をありがたく受けてその男子と一緒に部活に向かつた。

案の定、全体(合奏)が始まつていて、先生が指揮を止めた所を見計らつて中に入った。注目が私たちに移つた。少しびびりながらもいつもみたいに

「こんにちは」

と声をかけた。返事はまばらで、その中から一人、私に向かって、
こう尋ねてきた。

「青木さん、その人、彼氏？」

声の主は今井君だった。私はそれを否定し、先生に楽器を運ぶのを
手伝ってくれる旨を話した。その後、私はいつもの今井君の隣の席
に座り、出してあつたTubaのつば抜きをした。その作業をして
る私に向かって、もう一度、今井君は尋ねてきた。

「彼氏じゃないの？」

私は「違うよ。楽器運ぶの手伝ってくれるんだって」と返事をした。
その時、本当に小さく、「良かった」って今井君が言ったような気
がした…空耳だったのかな？本当だったらどんなに嬉しいことが。
その後、一回「パイレーツ・オブ・カリビアン」を合わせた後、先
生がスタンドプレイの確認をし始めた。スタンドプレイに全くもつ
て無関係のTubaは特に聞いていても意味がない。そんなことで
今井君はいつもみたいに私に雑談をしてきた。まずはパイレーツの
指番を書いてあげた事についてのお礼から。そして「僕たちもスタ
ンドプレイしたいね」という話題になった。それは部活後に先生に
伝え、デイズニーとキューティーハニーのある部分でスタンドプレ
イできることになった。

そして今日、それを実行しようと朝からスタンドプレイの確認をし
た。他人が見ればそれはただの練習風景だったが、私は「朝から今
井に会える」という幸せでいっぱいだった。

そして本番。あがりやすい私は「スタンドプレイをする」というこ
とでいつも以上に緊張していた。でも、隣に今井君がいるってこと
で、いくらか落ち着けた。

演奏終了後、いつもよりちよつと出来ない所の目立った演奏だった
けど、私の中では楽しい思い出として残った学発だった。

明日は合唱コンクール。これで優勝したら、とあるホールまで行っ
て歌うことができる。曲目は「IN TERRA PAX」。「地
に平和を」という意味のこの曲。私はこの曲に世界が平和になって

ほしいという祈りと今井君。君に対する想いを込めて歌おうと思う。

「IN TERRA PAX 地球に愛を … 私に夢を！」

ところで。今日、発覚した事実。

ずっと11月の中ごろにやると思っていた「吹奏楽祭」私たちにとつての「引退演奏会」今日、分かったの。中ごろなんかじゃなかった…

11月5日、私は君に告白をしたい。

番外編〜今日の出来事〜（後書き）

今日、分かったんです。もう一週間しかありませんでした。予定よりずっと早くに告白しなきゃいけなくなりました…どうすればいいんでしょう？

もしも…

そんな中で、何ヶ月かが過ぎ、今年も「吹奏楽コンクール」がやってきた。

アスベスト処理のために音楽室を追放され、体育館で練習することになったの。暑くてなかなかチューニング（音合わせ）が出来なかったの、覚えてる？

その日は、雲ひとつ無い晴天だったね。きっと君は覚えてないんだろうな…

私は、君の前で君のことがまだ好きなんだって話を友達としてたの。あれは絶対に聞こえてたよね？その時は本当に焦った。「何でここにいるの!？」って思わず叫びそうになっちゃったよ…その後、散々君が他の部員（後輩）にいじられてたの見たんた。その子たちはきっと私が話してたの聞こえてたんだね。きっと君もそのことでいじられてたんだよね。いつも困らせてばかりだね。本当にごめんね…でも、その後、信じられない事を聞いたの。それは君が私のことが好きだっということ。

確認もしてないし、盗み聞きだったから詳しくは分からないけど…本当なのかな。それが本当だとしたら、今はどう思っているの？好きでいてくれるの？

そんな希望を胸に、コンクールに出た。曲は「Ascension」意味は禁欲・苦行。

その時の私にはそぐわない曲だったかもしれないね。欲があったから…

結果は銀賞。思ってたよりは良い結果だったよね。そうして私の最後のコンクールは終わったの。

「青木さん、楽譜見せて〜」

君がそう言ったのは、音楽室がアスベストから開放されて音楽室が

使えるようになって間もない頃。学発に向けての新しい曲が配られて、そのCDを聞いてる時だった。

君は何故か楽譜を持って無かったね。何でかな？今聞いても仕方がないけど…。それは昨日やった「パイレーツ」の楽譜だったと思う。私はそれを承諾して一緒に楽譜を見てた。でも、正直それどころじゃなかった。

緊張して、どきどきして、…楽譜、見てなかった気がする。

その日のうちに聞いた話。それもやっぱり盗み聞きだったけど、

「今日のあの二人、ラブラブだったよね！」

「あゝ今井でしょ？」

そう言っただの聞こえたの。

それって誰と？すっごい気になって、「誰がラブラブだったの？」

って聞きたかった。でも、勇気無かったな…結局聞けず仕舞い。

もしも、それが私だったら…そんな事を考えてた。ずっとね。でも、違っただんだね。

最近…だね。部活の帰り道、君はいつもみたいに同級生の女子にいじられてた。そこでその女子は君のノートを窓から投げようとしながら

「お前さあ、今ここで告っちゃえよ！そこにいるだろ？」

そんな発言をした。それに対し君は

「…そっちの方がいい。」

って言ってた。気になってそっちの方を見てみたの。

パークスの子…だったね。君の好きな人。

もしも…(後書き)

最近、とは二週間ほど前のことです。見なきゃよかったって思いま
した。そつでなかったら夢をみていられたのに…と。

決意

どうしてだろう？ずっと覚悟していたことなのに…信じたくなくて、夢であってほしいって思った。

そして分かったんだ。やっぱり好きだった。君のことが、誰よりも…でも、現実が現実のまま、逃げたかったんだ。君に「好きなひとがいる」って現実から。

だから…話しちゃったんだ。友達に。そうしたら

「じゃあ、新しい恋だね。」

って言われて、クラスの男子と遊びに行かないかって誘われた。それは明日のこと。でも、やっぱり君以外の人を好きになれない…そんな気がする。だからやっぱり言おうって思った。傷ついても、嫌われちゃっても…今の私の気持ちは聞いてもらいたい。

「好きだよ。」

その一言を言うのにどれだけ緊張するんだろう？今でも緊張しているのに…

返事は多分、あのバレンタインの日と変わらないと思う。でも、聞いてくれるだけでいいんだ。自己中だよ。分かってる。

でも、先輩として、最後をお願い。これだけは聞いて。

「部活、これからも頑張ってるね。」

それだけは分かってほしい。いつか、君の顔を真っ直ぐ見れるようになったら遊びに行くから。その時にいないなんてこと、あってほしくない。だから、お願いね？

明日はどうゆう一日になるんだろう？結局、断れなかったの。友達の恋のキューピッドにでもなるのかな？彼女には、幸せになってもらいたいな…

そういえば、昨日の合唱コンクール、銀賞おめでとう！

合唱に力を入れている君の声は体育館中に響いてたよ。アルトを歌ったのに皆驚いてたけど…私も去年歌った曲だったね「時の旅人」って。

合唱のプロとしてアドバイスをちょうだい！私はどうだったかな？

「I N T E R R A P A X」。金賞を取れたから今度ホールまで行って歌うんだけど…。実は君への想いも込めて歌ってたの。だからかな…皆に「表情が豊かで良かった！」っていっぱい言われたの。ホールだと君はいないんだよね…ちゃんと歌えるかな？それに、それは「吹奏楽祭」が終わってからのこと…

失恋ソングになっちゃたりして、目が死んじやつたりとか…なっていないでほしいな。

決意（後書き）

やっと現在の話に追いつきました。これからは事細かな話が多くなってくると思います……どうか、これからどうなるのか、見守ってください！

引退

「え！？そこ吹くの？」

いつもの音楽室。全体中に「パイレーツ」のバスクラの部分を吹いてる私に君は話しかけてきてたね。

吹きながら私は首を振った。そんな私を見て、君はニコニコと笑ってた。その顔を見て、思わず私は笑ってしまった。

「何！？違う！会長様がバスクラを吹かないから！」

全体中なのに、演奏中なのに、君と喋ってしまった…実技試験だったら即、落ちてるね。

「ああホントだ。え？吹くの？」

「いや…違っ！あ…！」

また演奏開始。タイミングを逃しちゃった。これじゃあ一般入試でも目を付けられて絶対受かんない。

もう笑うしかない。と言うか笑っちゃって吹けなかった。これは完全に君のせいだよ。

「もお…！」

気を取り直して演奏したけど

「ちよつと、そこもうちよつとペット合わせて欲しいんだよね」

先生の一言で演奏中断。トランペットのパート練へ…結局、いつもの雑談開始。

「青木さん、Tubaそこ吹くの？」

「いや、お前は吹かなくていいの。音汚いから。」

会長様（元）からのお言葉。その時はクラリネットを持ってた。

「綾、よろしくね」

「うん！会長の音を汚さないように頑張る！」

いつもながら、会長綺麗だなあ…と思いつつ話してた。君が会長のコトが好きなら、絶対に勝ち目ない…。

ああ…でも君には他に好きな人がいるんだよね？

次の日、つまり昨日のこと。

「ごめんなさい。最後の練習なのに遅刻しました。」
って言って入ってきたのは君だった。

「あれ？覚えててくれたんだ…」

私はそんな事言ってたけど、本当は、すごく嬉しかった。君が私の引退する日を覚えてくれたことが。

そんなことが最後の練習の始まりだったね。

その日は久しぶりにパート練習があつて、私は実は少し楽しみにしてたんだ。でも、最後のパート練の夢は叶わなかったな…

「先輩、このピストンがはずれないんですけど…」

そう言つて来たのはユーフォの後輩。パー練の始まりの方での一言だった。

すぐに治る（直る）と思つてた私は一緒に治してたんだけど、…なかなか治んなくて、気付いたらパー練終わってたんだ。今思うと、やっぱり悔しいな…

全体の合間でいつもの雑談。あれも最後の雑談になっちゃった…

今日は11月5日。

今、これを書いている私は、実はもう君に告白し終わってるの。

ありがとう

結局、君に直接は言えなかった…でも、多分気持ちは伝えられたと思うんだ。

手紙、もう読んだ？私、こう書いたの。全部は覚えてないけど、多分こうだった。

「今までありがとう。」

色々あったけど、おかげで楽しい部活生活を送ることが出来たよ。

もう、一緒に演奏することは多分ないと思うけど、頑張ってたね。

何かあったらメアドを書いておくからメールちょうだい？

そういえば、部活(?)において1つ悔しいことが…

それは“あの”バレンタインから好きな人が変わらなかったってこと。

答えは自分でも分かっているとと思うから、返事はくれなくてもいい

よ。」

多分、そんなことを書いてたと思う。

どうしても直接言えなかったから…でも、もし君が私のことを好きでいてくれてるんなら、きつとメールくれるよね？

そう思つて、パソコンと睨み合いながら、今日の演奏の時よりずっとドキドキして、メールこないかずっと待ってたの。

でも、返事はこなかった。やっぱり、私は君にフラれちゃったんだ…

でも、今でも君を好きになったことは悔いていないよ。

2回も振られちゃったけど、君を好きになったことで、たくさん楽しい思い出とか作れたんだと思う。それにね、何よりも、君と音楽と過ごせたことが私、幸せだった。

きっと君のことを思い出すことで、悲しくなると思う。
だけど、絶対に忘れない。君を好きになったこと。

放課後の音楽室で、明日、君にさよならを言おうと思う。
でも、やっぱりこれを伝えたい。

『ありがとう』

終わりの始まり

「ねえ…待って、それってまだ返事もらってないだけじゃないの？」
そう言ったのは私の友達。最近ずっとテンション下がりがりっぱなしの私に気付いて

「何かあった？」

って話しかけてきてくれて、全部話した後だった。

「え…でも、メール来てないし…「返事なくていい」って書いたから、それは…ないよ。」

「じゃあさ、このままでいいの？」

「うん。前みたいに話せるのなら…それでいいかなって。」

今は体育の授業前で階段を降りているところ。歩きながら話してた。

「ねえ綾！あっち！」

友達の指差した方向には彼がいた。

ばっちり目が合った。

「……………」

無視されちゃった…。

「はあ……」

いつの間にか、私には窓に向かってため息を吐き出す癖がついていた。

「何？どうしたの？」

「うん…好きな人に無視されちゃった…」

(どうせなら、きっぱりと振られた方が楽だったのかな…)

そう思っていると、

「じゃあさ、直接聞いてみなよ！私が呼び出してあげるからさ！」

「……………え!？」

私、声に出してないのに…!!これってシンクロ？

「いいじゃん。パソコン室前なら放課後誰もいないし…いいんじゃない？」

「いや…その…いいよ。バレたら変な事になるし…」

「そお？気が向いたら言ってね。」

そう言っただけなのに、なんだか勿体なかったなって後から思った。

「部長決め、来週の月曜にやるんだって。その時は三年も一緒にっ
てさ。」

嘘！？何でこんな時に！？振られたばっかで気まずい時なのに！ま
してや無視されまくり中なのに！

「綾さ、この機会に聞いてみれば？どうせもう会わないでしょ？」
初めは乗り気じゃなかったし、きつと言えないだろうと思って断っ
てた。…でも、このまま気まずいままならキツパリ振られちゃった
方がいいかなって…だから決めた。

「部長決めの時、聞いてみるよ。」

* 終わりの始まり* (後書き)

最終話…のはずだったんですが…やっぱりどうしても聞きたくて。

放課後の音楽室で

久しぶりに部活を覗きに行った。

君はいつもの君だった。

笑って話しかけてくれた…

ねえ？まだ、一ヶ月しか経ってないよね…？

そう。結局私はフラれたんだ……。

ちょうどその日、たまたまタイミング良く、私はある人に告白された。

それで…今はその人と付き合ってる…でもね、

明日、ちゃんと振ろうと思ってる。

やっぱり違うって分かった。

やっぱり好きなのは君だけだよ…

そう思っちゃったの、どうしても抑えられない。

その気持ちだけには嘘がつけなかった。

今は、ううん、これからも君に告白するなんてこと、ないよ。

ただ、好きなのはどうしようもないから、

卒業したって、高校に行っちゃって、この気持ちだけはずっと持っていたい。

そう思えるほどに君が好きなんだ。

いつかまた、君に会いに音楽室へ戻ってくるよ。

大好きな音楽と一緒に、また、君に会いたい。

澄み渡った空にも、勇気付けられない。

冷たい雨の日はいつも一人な気がして。

そんな日がいっぱいあった

でも、「好き」って気持ちだけは何よりも強いつて

そう実感した。

君の姿を見るだけで、心が暖かくなった

君の声を聞くだけで、嬉しくなった

もう、いいの。

君にはこの言葉を送りたい

「ありがとう」

そして、夢ができた

いつか、こんなすばらしい事を教えてくれたあの音楽室に

今度は誰かに教えるために音楽の先生になって、舞い戻りたい

放課後の音楽室で

今日も心のメロディーが歌を歌ってる

放課後の音楽室で（後書き）

色々読んで下さってありがとうございました。

これで私の恋物語は終わります。でも、きっとまた恋をしたいです。

…もちろん、『放課後の音楽室で』ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814b/>

放課後の音楽室で

2010年11月14日10時37分発行